

参考図書

- 『五日市町誌』五日市町誌編集委員会編 五日市町誌編集委員会事務局
『いつかいつの民話とくらし』五日市民話民俗の会編 五日市民話民俗の会
『厳島神社の内侍』大知徳子 県立広島大学宮島学講座
『厳島図會』
『厳島道芝記』小島常也 宮島町
『絵図にみる昔の下蒲刈』下蒲刈町
『街道をゆく 夜話』司馬遼太郎 朝日新聞社
『空海の風景』司馬遼太郎 中央公論社
『郡司制の成立』渡部育子 吉川弘文館
『西行花伝』辻邦生 新潮社
『神社の系譜』宮元健次 光文社
『新・平家物語』吉川英治 講談社
『戦乱日本の歴史 保元・平治の乱』邦光史郎 小学館
『平清盛』NHK大河ドラマ特別展平清盛図録
『平清盛と佐伯景弘歴史パネル展図録』五日市商工会
『平清盛と宮島』三浦正幸 南々社
『鯛山物語』萩原昇
『都志見往来日記・同諸勝図』岡岷山 広島市立中央図書館
『日本史年表』歴史学研究会編 岩波書店
『エッセイで楽しむ日本の歴史』文芸春秋編 文芸春秋
『廿日市の歴史探訪』石田米孝 溪水社
『図説 廿日市の歴史』廿日市市編 廿日市市
『広島県史 原始・古代』広島県編 広島県
『広島県神社誌』広島県神社誌編纂委員会 広島県神社庁
『日本歴史地名大系 広島県の地名』平凡社編 平凡社
『平家納経と厳島の宝物』広島県立美術館編 広島県立美術館
『平家納経と厳島の秘宝』京都国立博物館編 京都国立博物館
『平氏政権の国衙支配』田中文英
『宮島町史』宮島町編 宮島町
『宮島本』廿日市商工会議所編 廿日市商工会議所

あとがき

小椋 春平

宮島口参道商店街の広告に、厳島神社の神殿や大鳥居の朱塗りについて書かれている記事がある。それによると、明治の初めに廃仏毀釈のあおりを食って、朱色は仏教色だとされ、しばらくの間、神殿や大鳥居から剥がされていた時期があったという。これを元に戻したのは、岡倉天心の片腕として古文化財の保護に努めた能美出身の陶芸家の六角紫水。私たちの小説『佐伯景弘』にも、この朱は物語の重要な鍵として採りあげている。

厳島のシンボルともいう朱塗りの神殿と大鳥居は、清盛の意を受けた景弘の手によって造営されて以来、八百年に亘って多くの観光客を魅了してきた。朱Ⅱ赤は、上古の頃から日本人の心に特別な趣を与えてきたもので、古墳にある棺などに塗られたベンガラベンガラの朱色は多くの神社仏閣にも彩色され、お稲荷さんの赤い鳥居など魔除けの色として塗布されただけでなく、赤は「明るい」からきたという。朝夕の太陽の赤を神聖視し、自然との共生のかけがえのない精神的象徴にまで昇華させた古代人の心は、今も継がれている。高野山に旅した木本泉さんは、その麓で丹生神社を発見する。丹生とは、水銀を含む辰砂を指し、この発掘に手を染めていた者に空海がいる。清盛の父忠盛がこの丹生（朱赤）を宋との交易に盛んに用い、大きな利益を手にしたことが、後の清盛の大きな躍進に繋がったということが、この私たちの小説の縦軸になっている。

佐伯景弘という歴史上の実在人物について、殆ど資料文献はなく、僅かに厳島神社造営に関わる当時の朝廷への建白書（建築申請書とでもいえばいいか）『景弘解』には、清盛の名でなく、景弘の名が記されている。木本さんと私は、この数少ない参考資料の中から佐伯景弘という人物を想像するところから、そ

の物語構成のシノプシスを始め、それは、不自由ゆえに奔放な想像も許され、清盛と景弘との関わりに資する史実を探り、その伝承を小説として書いていく作業は、むしろ愉快であり、その状況証拠を組み立てていく面白さは、二人を夢中にさせた。

畏友木本泉さんは、宮島対岸にあつて「宮島観光産業立地」を核にした「まちおこし」の提案グループである「かみきど倶楽部」の代表である。先に「景弘に学べ」とタイトルした木本さんのネットの投稿記事から、この小説執筆は生まれることに繋がった。私の小説に、その的確な史実検証やあるいは清盛と景弘の繋がりを精査推敲する木本さんのある意味での史観も含めて、ここに今までになかった小説的切り口の発見にも繋がったと私は考えている。この小説の著者名に木本さんの名を列記したのはその意味である。

西行法師を景弘の成長や神社造営への応援者として登場させたのは、私の独断である。ここには堀河の尼も重要な役どころで登場している。数少ない景弘の歴史資料ゆえに、世の歴史家に「荒唐無稽」を譴責されるかも知れぬが、こここのところは、どうぞ寛容の気持で見逃してもらえば幸いである。

あとがき

木本 泉

私が宮島口に住み始めて40年以上も経つ。家から見える嚴島神社を眺めながら、古代からの歴史に興味
がわいて調べているうち、この社殿造営を平清盛にその気にさせた佐伯景弘という男の存在を知ること
になった。さらに県立広島大学の宮島学講座での内侍や別宮の話などに想像力をかき立てられた。こうして
景弘の行動力とこの佐伯の地に残した遺産の大きさに感銘していた。

このような時、私の古くからの友人である香川正弘くんから、彼の主催するホームページに何か書いて
ほしいとの依頼があった。今年の1月のことである。彼は上智大学の名誉教授だが、全日本大学開放機構
の会長である。大学開放とは大学の講座を地域に開放して地域力の向上に役立てる活動と認識していたの
で、その後長きに渡りこの地の発展に貢献した佐伯景弘の行動に、現在の我々が学ぶべきことが多々ある
旨を書いて提出した。

それから暫らくして、なんと広島市佐伯区役所から私の景弘の話を書いた小説を書いてほしいという
依頼があった。文章を書くのと小説を書くのは全く違うのでお断りしようと思つたが、待てよ、近くに適
任者がいるじゃないかと思いついた。適任者というのは、この地で私の敬愛する小椋春平さんである。早
速彼に趣旨を説明すると、元々街づくりに深い関心をお持ちになっていられることもあり、協力していただ
けることになった。こうして博学多才な小説家の書かれた文章を、時代考証のため徹底的にチェックして注
文をつけるといふ、まことに痛快な作業を経験することができたのである。

広島市佐伯区のみならず佐伯にゆかりのある地域の人々にとって、この小説が、この誇りある歴史に根
ざした行動につながることになれば望外の喜びである。

解説

佐田尾 信作

「佐伯景弘」と瀬戸内海

船で島々の間を縫うことによつて「シークエンス景」つまり動的風景を読むことができる。離島航路が消えつつある今、クルーズ船でもチャーターしないとできないぜいたくだが――。

かつてシーボルトやケンペルといった異国の学者たちは瀬戸内海を旅してそれを目の当たりにした。物語的、神話的ともいえる「歌枕名所」に偏した伝統的な風景観に代わる価値観。島の段々畑だつて美しいと思う感性はこの時、生まれたのではないか。

その意味では瀬戸内海はシーボルトたちによつて「発見」されたのである。日本で最も早く指定された国立公園である理由が分かる。

宮島もまた歌枕名所。しかし小椋春平の小説「佐伯景弘」には、それだけにとどまらない瀬戸内海の描写がある。この感覚はどこで得たのだろうか。たとえば少年景弘が父頼信に問われる。

「この瀬戸内の海が、どうして温かく見えるか……」

「それは、どこを見ても人の暮らしが見えるからじゃ」

文中では宮島からすれば対岸である八幡川の河口の成り立ちが語られ、アユ、ヤマメ、ウナギ、ハゼなどの魚名が言挙げされる。

確かに瀬戸内海の歴史は開墾と定住と移動あるいは漂泊の積み重ねである。風景はほぼすべて人の手が加わつて形成された人文景観だ。民俗学者宮本常一の仕事からもよく分かる。

「佐伯景弘」は名所としての宮島だけを背景として描くのではない。営々たる対岸の暮らしがあつての宮島。随所に小椋春平の意図を感じるのは小生だけであろうか。

景弘は平清盛に嚴島神社造営を働きかけて実現させた人物だという。肖像画は現存していないが、東瀬戸内海のいくつかの地域の山車の飾り幕に刺繍絵が伝わる。神職の姿ではなく武將の姿として。にもかかわらず、なぜ、神社造営だったのか。景弘はこう独白する。

「修復された神殿は、海に溶け込み、瀬戸内の船人たちや浦里の漁師や船頭などの航海の安全を待み、父のいう暮らしの安寧や命の温もりを約束するものであつて欲しいものじゃ……」

そうか、嚴島神社はまさに移動と定住を繰り返してきた瀬戸内海民たちのアイコン。映画「二〇〇一年宇宙の旅」の石柱状の謎の物体、モノリスだと、個人的には見立ててみる。

ところで新聞社には時折、ふらっと現れ、ワツとしゃべって辞去する来客あり。小椋春平もその一人だが、ワツとしゃべる中で小説の構想を蓄積していったのかもしれない。

小椋春平とその仲間たちは宮島口のまちづくりにも熱意を注いでいる。宮島と宮島対岸に暮らす、すべての人に「佐伯景弘」が読まれてほしい。

※ 「シークエンス景」については、神戸芸術工科大学齊木崇人氏のご教示を受けている。

(中国新聞 論説副主幹)

発刊にあたって

広島市佐伯区役所

近年、少子高齢化や核家族化の進展等により、地域コミュニティの希薄化が顕著となっております。また、児童や高齢者、障害のある人、女性に対するいじめや虐待、暴力が大きな社会問題となっております。

こうした中、佐伯区においても、丘陵部では、昭和40年代から昭和50年代にかけて開発された団地の高齢化が進み、また、区内中心平地部では、大型マンションの建設等により核家族化が進んでいます。その結果として、地域コミュニティが醸成しにくい状況にあり、町内会、子ども会等へ加入する人が少なくなっています。

平成24年1月、NHKは、閉塞感が漂うこの現代社会に「挑戦」というテーマを掲げ、大河ドラマに「平清盛」を取り上げました。平清盛は、現代と同じく混迷した平安末期に新しい風を起こした人物です。この、平清盛と同じ時代を生き、親交の深かった佐伯区ゆかりの歴史上の人物として、「佐伯景弘」がいます。

佐伯景弘は、厳島神社の神主であり、佐西郡司ささいのこおりのつかさでもありました。佐伯区の名前は佐伯氏に由来していると言われています。清盛のように多くの史実に名を残した人物ではなく、出生や生涯について知られることのない謎の人物ですが、彼の業績は現代に光輝く足跡を残しています。

佐伯景弘は平清盛と親交を深め、その財政を支えることで清盛の出世を後押しし、清盛の力をもって壮大な厳島神社の造営を成し遂げました。先見性と行動力、そしてスケールの大きさを持った人物です。

また、都から厳島に皇族や平家一門を招き、中央の貴族文化を直接取り入れ、平家滅亡後は、源氏から厳島神社を守り抜きました。政治力に長けた人物でもあります。

佐伯区を横切る宮島街道は、厳島神社の参道として栄えてきました。佐伯区の今の賑わいも、佐伯景弘が残してくれたものです。

佐伯景弘は、平清盛と同じく郷土に新しい風を起こした人物です。

区民の皆様には、この「郷土の英雄」佐伯景弘の魅力や、景弘が住んだ地域の魅力を改めて認識し、自分たちの住む地域に誇りと愛着を持っていただきたいと思っています。

それが地域の一体感を生み、人と人との「絆」を深め、お互いが支え合う「まちづくり」に繋がると思っています。我々は、時代に「挑戦」し、新しい風を起こした人物、佐伯景弘に学び、そして感謝すべきなのです。

本書は、皆様に佐伯景弘の魅力について知ってもらうことを目的として発刊しました。できるだけ多くの皆様に読んでいただき、将来の佐伯区を担う子どもたちに素晴らしいまちづくりを託したいと願っています。

最後に、発刊にあたり著者の小椋春平氏、木本泉氏には多大なご尽力をいただきました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

推薦文

佐伯区町内会連合会

会長 川崎 正雄

近年、高齢化や核家族化の進展等により地域コミュニティが希薄化していますが、地域における様々な活動を進めていく上では、住民の日頃の付き合いやお互いに協力し支え合う気持ちが無より重要です。

こうした状況の中、各々の町内会においては、防災・防犯活動や祭り等の親睦活動などに取り組み、住民同士の交流を深めています。

平清盛とともに嚴島神社を再建した「佐伯景弘」、本書は、この郷土の英雄を通して、私たちに地域への誇り、愛着、そして絆の大切さを改めて感じさせてくれます。

是非、多くの人に愛読していただき、お互いの絆を深めることにより、安心・安全な暮らしを支え合うまちづくりの実現へと発展することを願っています。

推薦文

佐伯区コミュニティ交流協議会

会長 古池 里司

佐伯区コミュニティ交流協議会は、区内46の各種地域団体が連携して、より良い地域社会をつくるために様々な活動に取り組んでいます。住民主体のまちづくりを進めるためには、このような地域コミュニティの推進が不可欠です。

本書は、平清盛と平安時代を共に過ごした佐伯区ゆかりの人物「佐伯景弘」の独創性や実行力が描かれており、こうした彼の人間性や行動に共感する場面が多くあります。私たちは、彼の生涯から、人と人とのつながり「絆」の大切さ、地域への誇りや愛着を持つことの大切さを学ぶことができます。それは地域コミュニティの礎でもあります。是非、多くの人に愛読していただきたいと思えます。

《構成団体》

石内地区連合町内会、河内地区町内会連合会、五月が丘連合町内会、藤の木学区町内会連合会、彩が丘連合町内会、美鈴が丘連合町内会、八幡東地区連合町内会、八幡学区町内会連合会、観音西地区町内会連合会、観音地区町内会連合会、五市中央学区町内会連合会、五市学区町内会連合会、五市東学区まちづくり推進協議会、吉見園・藤垂園地区町内会連合会、五市南学区町内会連合会、海老園地区町内会連合会、楽々園町内会連合会、隅の浜・美の里町内会連合会、砂谷地区町内会連合会、上水内地区町内会連合会、水内地区町内会連合会、広島市佐伯区社会福祉協議会、広島西交通安全協会、広島西地域交通安全活動推進委員協議会、佐伯区老人クラブ連合会、佐伯区青少年健全育成連絡協議会、佐伯区民生委員児童委員協議会、佐伯区母子・寡婦福祉会、佐伯区身体障害者福祉協会、広島市手をつなぐ育成会佐伯区支部、広島市佐伯区公衆衛生推進協議会、五市市商工会、佐伯区子ども連合会、佐伯区女性団体連合会、佐伯区PTA連合会、広島市学区体育団体佐伯区連合会、佐伯区体育協会、佐伯区スポーツ推進協議会、広島西防犯連合会、広島佐伯地区保護司会、広島佐伯地区更生保護女性会、佐伯区地域活動連絡協議会、広島市佐伯区公民館運営委員会、佐伯地区青少年を育てる会、明るい社会づくり運動佐伯区協議会、佐伯区商店連合会（順不同）

著者略歴

小椋 春平

イラストレーター。

東京都生まれ。高校時代を広島で過ごす。

一九六五年広島市においてデザイン事務所を開設。自動車会社の宣伝広告に関わり、PR誌の編集に19年間携わる。

仕事の合間に小説を書く。情報雑誌関係に作品発表。

また原稿制作協力。『文芸ひろしま』に小説発表。

同人誌『セコイア』に作品発表。

情報文化誌に短編小説連載。

一九九九年宮島対岸の丘の上に住み、阿品の海と厳島の眺望を楽しむ日々である。

廿日市市文化協会大野支部長。

木本 泉

広島市生まれ。マツダ株式会社(東洋工業)へ入社。

車の設計・開発畑に従事し、マツダの米国進出に伴い、渡米してデトロイト郊外で家族と共に数年間を過ごした。帰朝後、ドイツ資本の企業ベバストジャパンの役員として国際的な視野と先進技術への取り組みで地元産業の発展に尽力した。

古代史に強い興味を持ち、ふるさとのもちへの思念に重ねている。

宮島口に住み、地元まちづくりグループ「かみきど倶楽部」代表。

廿日市市文化協会理事。

本小説の発刊に当たり、次の皆様から御協賛をいただきました。
厚くお礼を申し上げます。（敬称略、順不同）

医療法人翠和会養神館病院
学校法人修道学園広島修道大学
学校法人鶴学園広島工業大学
公益社団法人広島西南法人会
社会福祉法人三篠会養護老人ホーム喜生園
生活協同組合ひろしま
セムコ・ホールディングス株式会社
広島五日市ライオンズクラブ
広島佐伯ライオンズクラブ
広島市佐伯区医師会

著者

小椋春平

木本 泉 補

発行

広島市佐伯区役所(地域起こし推進課)
広島市佐伯区海老園二丁目5番28号

電話

082194319705

FAX

082192315098

E-mail

sa-chiiki@city.hiroshima.jp

平成24年(2012年)12月発行
登録番号 広V2120121647



佐伯区イメージキャラクター
「さえき景弘くん」
Designed by Sayumi Kai

地域。誇り、愛着、そして絆！

白
燕
五
白